



総題 「ローマの信徒への手紙」における贖い

SDA聴覚しょうがい者友の会教材部

第 3 課 すべての人が罪を犯した

浦島智加男

2010, 7, 10~2010, 7, 17

はじめに

「自分が罪びとであることを認めない限り、人は義認ぎにんの必要を感じることはありません。」とガイドの冒頭ぼうとう〈はじめ〉に書いてあります。多くの方は、自分が罪びとであることを認めようとはしません。罪人は「ざいにん」とも読めます。罪人は、人殺しや強盗など極悪非道ごくあくひどう（あらん限りの悪をなすこと）なことをしでかして、刑務所けいむしょに入られている人というイメージがあるから、一般の生活をし、警察のやっかいになったことのない人は、自分は、罪人などではないと思うのは当たり前です。ですから、自分は善人ぜんにんとは言えないまでも、まあ悪人あくにんでもないのに、キリスト教が「すべての人が罪びとである」という言い分は、納得なっとくできないのです。

私について言えば、少年時代あまり素行そこう（ふだんの行い）が良くない人間でしたので、自分は悪い人間であるという意識は常に持っていました。ですから、まともな人になりたい、誠実な大人になりたいとの願望がんぼうは強いものがありました。そこで、罪びとを清くしてくれるというキリスト教に憧あこがれていました。青年時代に、教会に行くようになって、この願いはかなえられました。

1. 福音を恥としない 7月11日（日曜日）

パウロが教えて下さる「福音」とは、人間となってこの世に生まれた神の子イエス様が、罪人の罪を身代わりになって、罪の罰ばつを引き受けて十字架で死なれました。それを信じる人の罪を救ゆるし、義人として神の前に立たせ、永遠の命を与えるために復活し、天にお帰りになった一連の出来事をさします。

この福音は、律法を守って良い行いをして救われようとするユダヤ人にとってはつまずきとなり、異邦人（神を受け入れない人）つまり、罪を認めようとしなない人にとっては愚かおろ（ばかげている）なものに見えるのです。

しかし、自分が罪の深い人間であり、律法を守ることは決してできない、良い行いはこれっぽっちもできないことを、聖霊によって教えられたパウロにとっては、この福音以外に自分を救うものはどこにもないことを知りました。福音は、「信じる者に救いを得させる神の力」であることを悟さとったので、他の人にはつまずきであったり、愚かおろに見える福音を、自分が信じ、人に伝える働きは決して恥ずかしいものではないと確信しました。

2. 人間の状態 7月12日（月曜日）

人間の状態をあらわすのに二つの説があります。性善説せいぜんせつ（生まれつき人間の性質は良くできている）と性悪説せいあくせつ（生まれつき人間の性質は悪い）です。キリスト教は、このどちらの説も受け入れません。聖書は、初めの人間は罪のない状態に神がお造りになったのに、サタンの誘惑ゆうわくによって罪を犯おかしてしまい、罪びとへんしんに変身したのだと聖書は教えます。その罪が、人間の遺伝子いでんしによって受け継がれて、アダムとエバの罪が人類全体に及およびてきたのでした。

ですから「正しいものはいない。一人もない」と聖書は、宣言します。一人の例外もなく罪びとであると断定しています。

3. 「1世紀から21世紀へ」 7月13日（火曜日）

進化論をはじめ、哲学や科学が発展してくるにつれて、人間は進歩し、人間の性質も良くなっていくのだという考え方が生まれてきました。知識を手に入れると、人間は神のようになるというエバへの誘惑の言葉どおり、様々な情報を手に入れるようになった人間は、自分がどんな状態であるか分からなくなりました。科学の進歩によって人間の力で幸福な社会を作れるのだと夢見しています。創造主である神から離れた人間は、自分が神によって造られた被造物であることが分からなくなりました。哲学者たちが「自分自身を知れ」といくら説いても、今日の多くの人は自分が何者であるかを知りません。偶像を拜むことの愚かなことが理解できなくなっています。

神を見失った人間は、自分の欲望のままに生きるしかありません。ロマ1章の29節から31節までに長い罪のリストが書かれています。これを見ると1世紀の人間がすでにこれほどの罪があったとすれば、ますます罪が増加してきた21世紀の人類の罪は、想像もできないほどです。

4. ユダヤ人も異邦人も 7月14日（水曜日）

神の民として、神によって選ばれたユダヤ人は、自分たちは真の神を知っていて、律法を守っている民であるという誇りがありました。ユダヤ人以外の異邦人（外国人、異教徒）は偶像を拜み墮落した人たちである、彼らは動物以下のようなものだ、と見下げていました。

聖書は、そのように威張っているユダヤ人も、彼らが見下けている異邦人も、神の前では、どちらも変わらない罪人である、と言いきっています。

クリスチヤンの生活は「下へ登る道」だと言った人があります。信仰の体験を積み重ねれば積むほどその人は清くなり、信仰も成長しているはずなのに、自分の中では、聖霊によって罪深さが示されるので、自分は一向に清くなっていないと感じますし、信仰は下向きになっているように思えます。しかし、実際は、自分の罪の深さが分かると、罪を清めていただきたいという願いも強くなり、ますます十字架の贖いの必要を求め、主イエス様に頼るようになるので、結果としては、信仰は上向きになっているのです。

5. 悔い改め 7月15日（木曜日）

「神の愛があなた方を悔い改めに導く」（ローマ2：4）。ユダヤ人たちは、選民なので、神様は自分たちを異邦人のようには、裁かれたいのだと考えていました。しかし、それは間違いであって、罪びとである以上、悔い改めなければ、神の裁きはユダヤ人にも同じく及ぶのです。ユダヤ人は、せつかく、神が提供して下さっている悔い改めの機会を無駄にしているだけでなく、かたくなな態度を持ち続けることで「神の怒りを自分のために蓄えている」ことになります。

私たちがこのように罪を犯しているのに、すぐに神の裁きがなぜ下らないのでしょうか。それは、神様は、ずっと忍耐をもって、私たちが悔い改めにいたるまで待ってられるからなのです。それだから、罪を犯しても神の裁きはないなどと、私たちクリスチヤンも、たかをくくっている〈みくびる、あなどる〉なら「神の慈愛と寛容と忍耐」を軽んじていることになります。悔い改めも、自分の力でできることではなく神の愛が私たちを悔い改めに導いて下さるのです。